

## 2022年度 横浜商科大学研究助成金 研究成果の概要

研究課題名 南西諸島における大津波伝承と象徴の研究

研究代表者 教授 中村 純子

南西諸島の中でも石垣島と宮古島を含む先島諸島は、1771年の「明和大津波」の被災地であり、多くの津波被災跡としての「津波モニュメント」や伝承が残る。「明和大津波」は地震よりも津波による被害が大きく、津波石や慰霊碑、津波にまつわる御嶽や井戸などがみられる。本研究ではこうした大津波による「津波モニュメント」および津波にまつわる伝承を分析し、そこで象徴されるものを考察することが目的である。石垣島周辺と宮古島周辺には津波と人魚の伝承が多くみられる。よって津波と人魚に関連する伝承を対象として分析し、津波の象徴性を考察した。

先島諸島では過去からの津波と「明和の大津波」にまつわる「津波モニュメント」が多い。とりわけサンゴ石等の津波石が多く、石垣島では東から南部の海岸にあり、宮古島では南部から下地島までの広範囲に及ぶ。こうした地域では津波にまつわる伝承が多くみられるが、以下の特徴をもつ。

石垣島では東海岸の野原地区に津波と人魚伝承が集中し、多くのバリエーションがあり、津波被害地と重なる。人魚は想像上の、いわば民俗学上の妖怪でありながら、過去に先島諸島に多く生息したジュゴン（ザンなど）とらえられた。ここでは人魚が津波を予告し、高台避難を勧めたと存在として、津波の生存者間で多くのバリエーションが生じ、滅災的内容となった。

宮古島周辺では下地島の通り池伝承のバリエーション、津波除け儀礼である「ナーパイ」にまつわる伝承、御嶽に関わるものなど多様であるが、竜宮伝承と重なるものが多い。ここでは「物言う魚」としてのヨナタマが人魚であり、石垣島と同様に助命や報復をする。

いずれも津波を象徴するのが人魚であり、海神と関わりが深い存在である。つまり竜宮という海底異界において海神が引き起こすとされる厄災、すなわち津波を人魚が媒介する。人魚は人々の行いにより津波を予告し助命する。その一方で予告に従わない、食すなどの場合に報復し、横死の要因として意味づけられる。人魚は海神の子や遣いなどと考えられるため、海神の乗物や遣いとされたジュゴンともつながる。先島諸島では過去にジュゴンが多く生息し、新城島のように琉球王府に納める地域もあった。ジュゴンは過去から神聖視され、不老不死の肉とみなされ珍重された。これは単なる食物ではない、他の海洋生物に代替されないアンビヴァレントな畏怖の念でとらえられる存在といえる。

津波伝承は観光において防災学習の観光に有効ではあるものの、負の側面をもつゆえに遊興の枠内で大勢に伝承されにくい問題も挙げられる。しかし市役所の民話冊子発行、博物館展示などで伝承の努力がなされており、さらにCD絵本「人魚の涙」や石垣島星野地区での人魚を利用した地域おこし、宮古島での島内ツアーにおける津波伝承などは、津波伝承を継承し広める可能性をもつものといえる。

\* 詳細は『横浜商大論集 第57巻第2号』（2024年3月発行）の論文参照